

介護保険制度下における支援関係の矮小化に関する研究

川向雅弘（聖隷クリストファー大学）

目的

本研究は、「社会福祉専門職として取り組む実践環境の醸成—介護保険制度下におけるソーシャルワークの成立可能性について—（仮題）」の研究目的である、ソーシャルワーク成立の方略を明らかにすることの一過程として、介護保険制度下における支援関係の矮小化状況を詳らかにすることを目的としている。本研究課題には 2015 年度から 3 年間の予定で取り組んでいる。2016 年度は予備的調査として自記式質問紙法による集合調査を行い、介護保険制職種への対人支援職としての意識調査を実施した。

方法

横浜市社会福祉協議会の協力を得て、横浜市社協が運営する 18 カ所の地域ケアプラザに所属する介護保険職種（地域包括支援センター4 職種、居宅介護支援事業所ケアマネジャー）を対象に、「支援の狭間」を生み出さないための、ソーシャルワーカーが行う「連携」「協働」、その前提として必要となる「越境」の課題についての意識調査を行った。

横浜市社会福祉協議会が実施する専門職研修に、『狭間』に取り組むソーシャルワーカーの『越境』の課題—地域を基盤としたソーシャルワークに不可欠な『連携』『協働』を講義に設けた。その研修講師を本研究代表者が担当し、課題への共通認識の構築を企図しつつ、研修終了後に受講者の提出課題となる「リアクションペーパー」に研修内容に沿った質問項目を設定し自記式質問紙とし、後日、記名あるいは無記名にて回収した。

考察

本研究では、「支援の狭間」を、ソーシャルワーカー自身が利用者にとっての最も身近な社会資源（＝制度）でありながら、制度としてのソーシャルワーカーが十分に機能しないことがもたらす状況と定義している。「支援の狭間」が生み出される要因に、①昨今の制度適用へ偏重した支援の一般化、②専門職種・機関の細分化・縦割化による支援領域の既成事実化、機関・専門職ごとの棲み分けによるニーズの無責任なキャッチボール、③組織・機関の専門職集団としての機能不全がもたらす、個々のソーシャルワーカーと優れた支援の孤立、④昨今の制度構造の変化と支援困難との関連性、⑤ソーシャルワークに対するアイデンティティの欠如等があることを調査から確認しつつある。

結論

ソーシャルワーカーが「一步を踏み出す（＝越境）」あるいは「踏み出せない」要因を詳らかにするために、2017 年度には、予備的調査において自記式質問紙に記名で回答したソーシャルワーカーの中から 10 名程度を選び、具体的な実践事例を通した「連携」「協働」「越境」についてのインタビュー調査を実施する。さらに、実践事例にかかわった他機関・他法人のソーシャルワーカーにも対象を広げ、「越境」への意識や態度、主体性の程度、また、その態度や主体性が形成される背景について、さらに、「良い支援チームの条件」についての語りを得ることを目的としてインタビュー調査を実施する。

学会発表、論文発表の状況

関連論文発表：『狭間』に取り組むソーシャルワーカーの『越境』の課題—地域を基盤とするソーシャルワークに求められている連携・協働とは—『ソーシャルワーク実践研究』(5) ソーシャルワーク研究所、12-21 頁、2017 年 3 月。